

カタ変数理論の発展

— Parsons 行為理論のための習作(1) —

青 山 秀 夫

I 問題の内容

カタ変数 (pattern variables) 理論がその主要関心事の1つであったころ、Talcott Parsons (1902~) は「試論集」(p. 207) の中で「カタ変数の歴史の光の中で」という言葉をのべている¹⁾。やや感慨深げなこの言葉の背景の1つは、カタ変数を使って、社会の構造やシステムの状態を特徴づけたいという、その図式に託した彼の夢が、最初(1951)必ずしも成功せず (D, pp. 221~223.)、この「試論集」ではじめて、R. F. Bales の仕事をとり入れて成功したという、周知の事実である。もう1つ、彼がのべているのは、カタ変数の着想の出発点は、Gemeinschaft-Gesellschaft のあのテンニース図式の批判だったが、その理論がここまで成熟すると、その中に見事にテンニース図式を包容摂取できるようになっていた、という彼の解釈である²⁾。

カタ変数に関する彼の回想をもう1つ見よう。——問題状況がその後多少変化したのち、或る機会 (1961, e. pp. 317~318.) に彼は、彼の従来の理論的業績を、思いつくまま次のように列挙する。「〔1〕カタ変数図式の最初の発表 (1939)。〔2〕「総合理論」(1951)での取まとめと図式づ

くりの仕事。〔3〕Bales および Shils との協働による「試論集」(1953)—ここでは〔 α 〕システムの機能的課題 functional “system problems” と、〔 β 〕時間的経過のなかの過程の諸位相、の両者に焦点がおかれる。〔4〕「経済と社会」(1956)において input-output 図式について行われる着想の展開。〔5〕カタ変数図式のいっそう体系的な拡張・再論のころみ (1960, d.)。』ちょうどこのころ、Dubin などの批判³⁾があり、再び彼の関心をカタ変数が占めていたためか、以上では変数図式の仕事を中心に発展がえがかれている。

さて、「カタ変数理論の発展」という標題に、やや意外な方もあろうし、そうでない方もあろう。何れにしても、変数図式の理論的背景に変化があったことは、上記のとおり、疑いないようだが、その概要を年譜的に表示すれば、表Iのとおりである。

表Iに簡単な説明を加えよう。Parsons の業績は、引用の簡単のため、記号化する。まず書物には、御覧のとおり、ゴシック大文字を充てる。論文は、年次と a, b, c を用いる点は通例どおりだが、同一年次内での順序 a, b, c の決定は、今後、著書 M (1969, 「政治と社会構造」) の終りにある業績一覧での順序によることにしたいの

- 1) Parsons の業績で本稿に引用するものの多くは、表Iに出ている。次に、ここではカタ変数という言葉を用いるが、これは「型の変数」という既成の (pattern という意味をもっている、型という邦語を活用した点で) 立派な訳語 (たとえば表I文献Dの永井・作田・橋本共訳「行為の総合理論をめざして」を見よ) の縮約のつもりである (時として「変数」と略称する)。「カタ変数理論」という表現についていえば、Parsons がよくつかうのは Pattern Variables Scheme だが、ここではその理論的側面が重要なので、カタ変数理論という。
- 2) 立入って説明すると、4機能図式の Iセクターと Aセクターが、変数のタバで特徴づけられるようになった結果、Gemeinschaft-Gesellschaft に (或いはそのような構造の対照に)、それぞれ、very closely に対応するようになった、というのが、彼の議論である。もっとも Parsons は、のちに (L-G) と (I-A) とを、それぞれ、Durkheim の機械的連帯と有機的連帯に当てる見方をとるようになる。
- 3) Robert Dubin, “Parson’s Actor: Continuities in Social Theory,” in, A.S.R. August 1960. (いまは Parsons の著作 L に、附録として収録されており、本稿での引用はすべてこれによる。) Dubin のこの仕事は本稿第IV節の主題の1つである。

表 I カタ変数図式年譜

1935					b. "The Place of Ultimate Value in Sociological Theory"
37					A <i>The Structure of Social Action.</i>
1939	カタ変数図式の初まり				B. <i>Essays in Sociological Theory Pure and Applied</i> , 1st ed.
1949					
1951	カタ変数図式に関する模索と発展				
		→			
52					
53					
54					B ₂ <i>Essays in Sociological Theory Pure and Applied</i> , 2nd ed.
55		→			F <i>Family, Socialization and Interaction Process.</i>
56	カタ変数の図式化, 一応片づく				
59					a. "An Approach to Psychological Theory in terms of the Theory of Action", in, S. Koch(ed.), <i>Psychology</i> , Vol. III.
					d. "Durkheim's Contribution to the Theory of Integration etc." (取L)
1960	根本的な再検討				H <i>Structure and Process in Modern Societies</i>
					I <i>Social Structure and Personality</i>
61					J <i>Societies: Evolutionary and Comparative Perspectives.</i>
64					L <i>Sociological Theory and Modern Society</i>
66					M <i>Politics and Social Structure</i>
67					N <i>The System of Modern Societies</i>
68					O <i>The American University</i>
69					
71					
73					
				a. "The Professions and Social Structure" (取B ₁ , B ₂)	
				C <i>The Social System.</i>	
				D <i>Toward a General Theory of Action</i> , 「総合理論」	
				「試論集」第3論文	
				「試論集」第5論文	
				E <i>Working Papers in the Theory of Action</i> , 「試論集」	
				d. "Some Comments of the State of General Theory of Action", A. S. R. Dec.	
				G <i>Economy and Society.</i> 「経済と社会」	
				d. "Pattern Variables Revisited: A Response to Professor Dubin", A. S. R. Aug. 1960. 「再考」 (取L)	
				e. "The Point of View of the Author", in, Max Black (ed.), <i>The Social Theories of Talcott Parsons.</i>	
				"Some Problems in General Theory in Sociology", in, J.C.McKimney et al (eds.), <i>Theoretical Sociology: Perspectives and Developments.</i>	

で、ここでもその方針をとるが、例えば、1960, d. "Pattern Variables Revisited" は、この一覧の1960年分の第4論文である。ただし、これはよく使うから、記憶技術上の便宜のため、「再考」という呼称を併用する。またこれは論文集Lに入っているの、そのことを(収L)で示し、引用に便する⁴⁾。

次に、この表の2番目、3番目の欄で、カタ変数理論の発展を示す。その発展は、可成り明瞭に3つの時期に区分される。第1は、いま彼自身言及していたように、発端となった1939年の論文。

表II System Problems and Pattern Variables

System Problems	Attitudinal Aspect	Object-Categorization Aspect
Adaptation, A	Specificity	Universalism
Goal-Attainment, G	Affectivity	Performance
Integration, I (System-Integration)	Diffuseness	Particularism
Latency, L (Pattern Maintenance and Tension Management)	Affective Neutrality	Quality

表Iにつづいて、表II、表IIIをつくった。表IIは、Parsons自身の表(1953, d. p. 625)に微調整を加えただけである。また表IIIの方向での整理については、Sprottの評判の高い論文の参照をおすすめしたい⁵⁾。

ここで序でにカタ変数の呼称の訳語の問題にふ

れておこう。どの道過不足は避けたいという留保は、本稿のような問題では、たえず必要であり、以下ではこのことを前提しながら議論をすすめるつもりだが、変数の呼称の訳語についても同様である。しかし、quality-performance および affectivity-(affective) neutrality の2組に

- 4) Parsonsの仕事はよく知られているので、本稿では引用をできるだけ簡略にした。たとえば、Dに対して、ParsonsはEdward A. Shilsとともに編集者であり、本稿に関するかぎり、このDからの引用はすべて、そのPart 2をなすParsons and Shils (With the assistance of James Olds), "Values, Motives, and Systems of Action"からである。
- 5) 1968年の論文"Some Problems etc."はそのまねな例である。カタ変数そのものの個別的利用の例は、もちろん多い。
- 6) W. J. H. Sprott, "Principia Sociologica," *The British Journal of Sociology*, Sept. 1952 and Dec. 1963. なおカタ変数の類別は重要であるから、簡明な呼称が欲しいが、1960年のDubin-Parsonsの論争以後〔客体の〕modality および〔主体の〕orientation という言い方が市民権を獲得するので、表III Aが示すとおり、本稿ではこれを利用した。御注意いただきたい。

第2は、著書CDEでのその激しい探求の時期。「経済と社会」(1956)では、本稿表II、IIIが示す形で図式が整備されるが、これがこの段階の終点である。第3は、Dubinの問題提起に応じて「再考」(1960)で行った再検討である。これ以後は、図式そのものが論議の対象となることは少ない⁶⁾。

以上に対して、最右第4欄には、参考のため、行為理論のその他の問題群や社会システム理論などにおける重要な展開を、ややランダムに掲げた。

表 III カタ変数図式概要

A カタ変数の編制

2 大 類 別	カ タ 変 数 の 4 つ の 組
I Object-Categorizing Variables (以下しばしば modality 変数と言い m変数と略記する)	a) universalism 対 particularism b) quality 対 performance
II Attitudinal Variables (以下しばしば orientation 変数と言い 0変数と略記する)	c) (functional) specificity 対 (functional) diffuseness d) affectivity 対 (affective) neutrality

B 2大類別の意味

- I Object-Categorizing Variables 《客体(相手)をどのようなものとして構成するか》に関する変数
- II Attitudinal Variables 《主体(自分)がどのような態度をとるか》に関する変数

C 4組のカタ変数の意味

I Object-Categorizing Vs.—《どのように対象を構成するか》について

- a) [‘universalism’ 「一般的に可能な」
 [‘particularism’ 「或る特殊・個別的な関係をもつ」 } 対象として考える
- b) [‘quality’ (‘ascription’) 「出自本位に」
 [‘performance’ (‘achievement’) 「業績本位に」 } 対象を考える

II Attitudinal Vs. (《どのような態度をとるか》)

- c) 相手に対して態度をとる場合—————
 [‘(functional) specificity’ —相手の或る特定範囲の特質に対してのみ
 [‘(functional) diffuseness’ —相手の全面にわたって
- d) 《相手に対してとるべき態度としてどういう態度が妥当とみとめられるか》について
 [‘affectivity’ emotional な態度が妥当とみとめられる
 [‘(affective) neutrality’ (仮訳: 「感情抑制的」態度決定)

ついでという、この区別は内容明瞭であり、ズレは別として、訳語にはまずこまらぬ。これに対して、universalism-particularism および specificity-diffuseness という区別は、厄介である。もともと扱いにくい区別だからだ。訳語が不可歎なときは、「特殊関係重視的(対象構成)」とか、「(専門家的) 責務限定的(態度決定)」と

いうような、字面では長い(しかし心理的負担は軽い)訳語からまず入って行くことに、私はしている⁷⁾。

さて、変数理論の発展を、上記の段階区分にしたがって、追跡することが本稿の仕事である。元来、変数図式は、社会学概説書では、たいてい表 II, III所掲のような形でのべられ、しかも「経済

7) このおこわりは、表 III Cにおける “quality”-“performance” の説明に早速あてはまる。

8) 念のため、「総合理論」邦訳の訳語を見ておこう。— a) 普遍主義—個別主義。b) 性能—成就(所属本位—業績本位)。c) 限定性—無限定性。d) 感情性—感情的中立性。なお “Self-orientation—Collectivity-orientation” の訳は「自己中心的な志向—集集体中心的な志向」。

と社会」の **Technical Note** の要説に依頼して可成り硬化固定して考えられやすいが、しかしこういう図式化に対して、この点の **Parsons** の思索の流れはそれを包んで遥かに広く深く、また今の彼の理論はこの要約よりも前進している。われわれは、カタ変数理論の発展を追跡しながら、こういう点も或る程度考察したいとおもう。

かように、この理論の発展を3段階を通じて観察することが、本稿の課題である。もちろん、この問題設定の趣旨をここで立入って論ずることは出来ないが、ただ、問題の所在の、**Parsons** の仕事を背景とした粗描だけは、叙べておきたい。

まず、カタ変数は彼の行為理論（あるいは人間の問題の処理）に関する大問題群の1つであり、そういうものとして 1) 概ね現代アメリカ（特に新行動主義）の心理学を念頭において構成される、行為の理論図式の問題、2) 精神分析の導入、3) 一般的包括的行為システム理論の展開、4) 欧米従来 of 社会学者の業績の継承摂取、などの大問題群と併存関連する。次にこれに対して、社会システム或は“**society**”の問題（ミクロに対するマクロの問題）があり⁹⁾、さらに、純理に対する、いわば純理外の、歴史的社会的事実の考察も、終始、重要度を高めて来ている。**Parsons** の場合は、一方ではこういう問題構成を充分意識しながら、他方、特定の問題に視野を限定して考察を深めることが、彼の体系の内容・貢献の両面から言って、まず、必要である。もちろん、困難な仕事だが、第1次的接近の意味でこのための作業をいささか試みたいとおもう。

II カタ変数の古典的形態

——近代社会と知的専門職業——

Parsons の1939年の論文（1939, a. 以下引用

には **B₂** を用いる）は、利己心対愛他心（**self-interest, egoism—altruism**）の角度だけから社会を論ずるといふ一般に行われ易い考察が欠陥をとまなうことを、近代社会の職業構造（**occupational structure** 専門的分業的職務構造）、とくにそれまで考察の乏しかった **professions** の問題に関連させて扱っているが、この結果、先に扱いにくいと言った2組のカタ変数、**specificity—diffuseness** と **universalism—particularism**、が焦点におかれることになった¹⁾。周知の社会的事実のなかから、従来見落された理論的含蓄を、平明な分析によって取出す過程で、この2組の変数を説得的に確定した好論文である。

それでは彼は、この2組の変数をどのように確定するか。ここでは便宜上、やや自由に、官僚制による近代社会の特徴²⁾ づけという、あの周知の **M. Weber** の議論と対照しながら、彼の論点を明かにする。彼自身の行論に関心をおもちの方には、彼のこの論文の美しい叙述の御一読をおすすめしたい。

さて、**Parsons** の議論は、さしあたり、次の3点で **Weber** のそれに相似である。

(1) **M. Weber** が、近代社会の、資本主義・社会主義を通じて一貫する特徴の1つとして、(**modern**) **bureaucracy** を挙げ、その構造を論じたことは、周知のとおりだが、**Parsons** でも、近代社会の特徴たる「職業構造」が同様の意味で取り上げられる。恐らく、相違が1つある。この構造として **Parsons** では、私企業 **business**、官庁 **government and public administration** の外に、学者・医者・弁護士などの **professions** も含まれている点である。（これが、その後も彼が終始貢献をつづけている分野であることは、いうまでもない。）

(2) **Parsons** も、人間の行為を制約するものが、利害関心 (**interest**) と理想 (**normative**

9) もちろん、社会系は、パーソナリティ・文化システムとともに、一般行為システムの部分系であり、したがって根本的には一般行為理論の枠の中で扱われる、というのが **Parsons** の一貫した立場だが、社会を行為（人間）と一応切離して取扱うことに充分意義があることも、周知のとおりである。

1) 変数図式自体を扱うまでには、まだ進んでいないわけだが、社会系の **A**セクターと **I**セクターに対応する変数のタバが（タバの形をとらないまま）ここに現れたことは、興味ふかい。なお、*Daedalus*, Fall 1970 の彼の論文 (p. 843) によると、ここで彼のいう“**disinterestedness**”は“**Collectivity-orientation**”の意味であった。

2) 近代は **modern**、現代は **contemporary** という風に、2つの言葉を使い分けたいが、時に混乱が起るかもしれない。おゆるしを願っておく。

patterns) である (B₂, p. 45.), と考える点では Weber に近い。両者の相違としては, Weber が超日常的要素も考え, Parsons が上記 2 要素の統合融和が状況に左右されることを陽表的に重視することなどがある。

(3) 人間間の交渉を, Parsons は, 全人的 (total) と局部的 (segmental) とに区別する。この区別は, Weber における *persönlich-sächlich* (英語では *personal-impersonal*) の区別に恐らく近いであろう。

このような見方から彼は, (a) 合理性 (ただし彼の場合, *rationality* は伝統主義の対立として考えられるだけである), (b) (機能的) 専門的責務限定的傾向 *functional specificity*, (c) (相手との間の) 特殊関係重視とは全く逆の, それと反対の傾向 *universalism*, の 3 点が近代的職業構造の共通要素であることを主張し (B₂, p. 36. 以下), さらに例えば (α) 自利心対愛他心の図式を人間と社会の考察の根本に置く見方が誇張または *oversimplification* であり, (β) ビジネス対プロフェッションでの相違を自利心対無私性 (*disinterestedness*) におくのも同様の謬りだ, と指摘する。

この *occupational pattern* の第 2 の特徴の説明に当って彼は, 医者・弁護士(さらには官吏)を例示に用いる。この場合, こういう専門家は「彼の畑では」それだけの専門能力をもち, 十分な実績を示し, それによって社会から “*professional authority*” をみとめられ, 彼自身もこの役割期待にしたがって行動する。これが *specificity* であるが, 彼は, 医者対患者の場合などと比較して, 夫婦の関係が, 責務限定的でありえず, むしろ *diffuse* であることを, 対照的に指摘する (B₂, pp. 38~40.)。

次に, (相手との) 特殊関係無視と特殊関係重視との対照にうつろう。人と人との関係には, 全人的なそれと局部的な交わりとが区別される。明かに, 専門家の責務限定的態度は *segmental* だが, だからといって, *segmental*=*specific* とはいえない。その 1 例として Parsons は友人関係 (恐らく例えばクラブでのそれ) を挙げる。ここから, *universalistic* 対 *particularistic* の対が生れる。後者の特徴が, 相手との間の特殊関係の

重視にあり, 前者がその逆であることは, 繰返すまでもない (B₂, pp. 40~42.)。

「社会的行為の構造」(文献 A) ののち 2 年, 2 組のカタ変数を中心として Parsons がこころみた以上の立論の印象は, 簡素だが, 力づよいということである。以下 3 項に分って, 変数理論その後の発展を顧慮した考察を附記するが, この考察によっても以上の印象はかわらぬであろう。

(1) Parsons の CD における仕事の特徴の 1 つは, 心理学の成果を批判的に摂取しながら, 行為理論の体系構成を推進したことであるが, この点, すぐあとでも多少ふれる。しかし CD での展開の最大の特徴はいうまでもなく, (一) システムの着想の導入, (二) 一般的行為系による統一的包括を背景として, パーソナリティー・文化系・社会系の 3 システムについて体系的分析をこころみたこと, の 2 点であり, 変数の考察も, もちろんこれによって著しく発展する。しかし変数に関連する飛躍として Parsons が実際に指摘しているのは, それよりもむしろ, 主体の拡大である。すなわち, 「その役割の中でのパーソナリティー」だけが行為主体であったのが, 集合体 (*collectivity*) も主体たりうるとされることである。(なお, さらには行為系の部分系として, 文化系も行動的生活体 *behavioral organism* も主体たりうるとされる。)

(2) 社会の血縁的構造と職業的構造との相違, あるいは血縁社会の役割構造と職業的社会的それとの相違を, 以上の 2 組のカタ変数を用いて説明することは容易である。血縁的構造の下では人の関係は *diffuse* であり, *particularism* が支配的である。反対に職業的構造の下では, 人の関係は *specific* であり, *universalism* が支配する。のちに Parsons は, 「カタ変数図式の端初は, 役割構造を価値の分析に——即ち, 制度化されて社会系内に存在する諸価値の分析に——結びつける試みに発した」(G, p. 33.) とのべているが, カタ変数の上記の利用は, この観点を示すものに他ならない。功利主義批判と主意主義的行為理論という Parsons 本来の立場は, 今後のカタ変数図式の展開を一貫すべく, すでにこの古典的形態の中にも明瞭に看取できるのである。

(3) この論文での Parsons の展開は, 簡素な

分析のレベルでおこなわれ、単純に「社会的行為類型の設定」として受取ることができる。この点、行為主体⇄社会構造（左右両項間の相互作用関係）の分析として考えた場合、Weber のあの「支配ないし Legitimität の図式」が、その用語上、主体←構造の方向を強調するとき印象を与えるのに対して、Parsons の構想は、直前の(2)でものべたように、主体→社会という方向の印象がややつよい。Parsons 自身の「カタ変数は、社会系内の諸役割の型を分類するための概念図式として、最初現われ、……その分析は、行為主体という都合のいい足場から社会システムを見渡す（“look out”）ものであった」（「再考」、L, p. 194.）という言葉は、上記の事情を指すと見えそうだが、今後の展開のため、この機会におお2点を注意しておきたい。

a) 周知のように、現代心理学は、刺激と反応との間に「仲介変数」をかかんがえ、「記憶痕跡」や「動因」のように、経験的事実から合理的に推論されたものを「仮説的構成」として理論構成に利用する³⁾。Parsons も、すくなくとも50年代は、この行き方にしたがうようである（D, p. 64, 92, 159）。したがって、パーソナリティでは要求性向（need-disposition）⁴⁾、社会系では役割期待は、彼によると、この意味の hypothetical entity である。（彼は construct といわず、entity という。「試論集」p. 87.）この限りでは、因果帰属過程で要求性向・役割期待に隣接して存在するカタ変数も仮説的構成ということになる。しかし、この1939年の仕事の場合、彼はどう考えていたか。諸般の事情から見て、こういう点に彼はあまりこだわっていなかったように思われる。

b) もう1つ、カタ変数の方法的背景について注意すべきことがある。——ここではちがうが、間もなく、ちょうど仮名を束ねて言葉をつくるよ

うに、カタ変数を幾つかタバ（束）にして使うようになる。この際表Ⅱも示すように、 α 曲折のすえ、結局2変数でタバ1つづくことに落着く。（変数束では、組合せだけが重要であり、順序は意味をもたず、重複はゆるされない。） β ）タバ1つと、4機能図式のハコ1つとを対応させる。 γ ）“pattern variables opposites”一どの変数にも、互に相性の悪い（変数束をつくれぬ）変数が1つある。「互に添えぬ」この変数は、例えば「感情的——抑情的」というように、元来1対の組を形成している。 δ ）4対8個の変数があり、以上の条件下で2変数で1束つくれば、結局24束できる。表Ⅱは、そのうち4束をえらび、4つのハコ（函）に対応させる。のちには、16束をえらんで16のハコに対応させる（「再考」、L, p. 198, 208.）⁵⁾——4機能図式の発展につれ、これをささえるカタ変数の役割も複雑さを加えるが、今の場合はまだ、変数束も考えず、相手の函もまだないという点で、事柄は簡単であり、変数の働きもあまり窮屈でない。

Ⅲ カタ変数理論の展開過程

「たしか1940年代終り近いころから、心理学的・微視社会的な諸問題に対する関心から、再び（経済をふくめて）巨視社会的問題に対する関心に向う動きが私に生じた」が、……「しかしこの動きにもかかわらず、*The Structure of Social Action* [1937, A] の完成から1951年刊行の2主要著作までの期間の私の知的関心ならびに理論的展開には、或る1つの統一があるように思う。この連続を形成する最重要の糸は、のちにカタ変数図式とよばれるものにあつたように思う。」かようにして、カタ変数理論は、漸次あの4機能図式（さしあたり社会系中心のそれ）に集約されるシステムの考察にやや先行して、その整備充実を支

3) この点の説明は、例えば E. R. Hilgard et al., *Introduction to Psychology*, 6th ed., 1975. などにも見ることが出来る。

4) disposition には「素質」「傾性」（G. W. オールポート、今田恵監修「人格心理学」）の訳語もある。

5) 本稿表Ⅱは周知だから、タバ・ハコの用語も恐らく自然に理解されよう。Parsons では、タバは “combination (of [the values of] pattern variables)”，まれに cluster（「試論集」）だ。ハコは subsystem が多く（初期には cell—まれに box—も用いられる）、時に dimension で間に合せるが、“cluster” “cell” の類も用いられる。「再考」などのように、（行為）系がまず 4 clusters に、ついで各 cluster が各自また 4 cells にと、2段に分れる場合には、母バコ・子バコと区別する。なお、本稿では、システムと系とを互換的につかっている。

えながら、展開するわけだが、当面われわれの問題は、この段階の変数理論の発展である。

1939年の論文からの推移についてはすでにふれた。ここでは、「総合理論」から「経済と社会」までの発展を、変数それ自体に関しての変遷からはじめて、叙べて行こう。

よく知られているように、最初のカタ変数図式には、表Ⅲの4組以外に、「自己中心的志向」対「集合体中心的志向」の組があり（E, p. 67.）、呼称についても、achievement-ascription から performance-quality への変化があった（E, p. 80.）し、さらに類別にも動きがあり（D, p. 76, ff.）¹⁾、「試論集」（E, p. 66.）ではほぼ現形に落ちつく。

次に、カタ変数図式の扱い方にも推移があるが、これについても単純なことから始めよう。

第1は、前にもふれたタバのつくり方である。2変数1束におさまるまでには、変遷がある。

カタ変数は、変数といっても（少くとも建前上は）連続的に変動するそれではない。例えば、態度決定について、抑情型 neutrality と感情型 affectivity との間に、中間のそれはない、というのが Parsons の立場である（D, p. 78, 91, E, p. 66.）から、これがタバづくりの条件になる。ところでこれ以外何の制限も設けない結果、5変数のタバが、 $2^5=32$ 束だけ出来る場合が、「総合理論」では考えられている²⁾。（D, p. 172, 184, 258, Fig. 10 etc.）

しかし「試論集」第3論文では、相性の良い変数2個のタバ4束に、8変数をふりわけ、さらにこのタバと行為空間の4つの次元の各々を対応

させる（p. 88.）。本稿表Ⅱがそれである³⁾。

この4束は、表Ⅱが示すとおり、「経済と社会」のものと同じだが、第5論文は、なお2点で、やや新しい試みを取り入れる。

第1に、いわば「補助的組合せ」（the auxiliary combinations, L, p. 196.）として、(a) neutrality-performance, (g) specificity-particularism, (i) affectivity-quality, (l) diffuseness-universalism というアンサンプルを、もう1つつくった (a, g, i, l は配置さるべきハコを示す)。のちの「再考」では、行為系の表示で、母バコ A の子バコに、この4束が、この配列で貼りつけられる。（L, p. 198, 208, Fig. 1, p. 198, Fig. 2, p. 208. 本稿表Ⅳ, V を見よ。）

第2に、「試論集」第5論文では、本稿表Ⅱおよび上記の、2つのアンサンプルを重ね合わせて、これを4機能図式の4つのハコに貼りつける。例えば、A のハコとは、spec—neut—univ—perf の4変数のタバが対応する（E, p. 180.）。この結果は、「試論集」p. 182, Fig. 2. に見るとおりだが、この第5論文では、こういう変数のタバを用いて立入った分析が進められる。かようにして、2変数1束ということを終点と見れば、第5論文は、「経済と社会」での「収束」までの道程での1つの曲折になる。——他面、この第5論文で、例えば A, G, I, L というあの呼称が、ほぼ確立する。

いっそう内容的な問題に進んで、「カタ変数は、いったい、どういう目的のための理論的用具か」「カタ変数を何に使うか」という観点から、推移

1) ここでは、ascription-achievement, specificity-diffuseness の2組がm (モダリティー) 変数であり、残る3組がo (オリエンテーション) 変数とされている。ただ、この点で興味ふかいは、この「総合理論」(pp. 91~98, 184) でも、4変数 (self-collectivity 変数をのぞくそれ) について、表Ⅲと類似の区別が、別の観点から行われていることである。この場合まず問題なのは、要求性向 (パーソナリティー系) および役割期待 (社会系) の価値志向の可能な型—いわゆる value components cf. D, p. 93, 94—である。理論的に可能な型は、 $2^4=16$ (変数5個ならば $2^5=32$ —D, p. 93, 172, Fig. 10 etc.) だが、もっと縮約されると考うべき理由がある。ここには立入らないが、この理由によって、要求性向に関係ふかいは o 変数であり、役割期待に関係ふかいは m 変数、という結果に、事実上、なる。これを Parsons は the “symmetrical assymetry” と名づけるが、とにかくこれによって表Ⅲと同じ類別が、はからずも出来上る。なお、Parsons はこの観点から「総合理論」の Fig. 3, 4 (pp.249~252, C, p. 102ff, Table 2 etc.) をつくり、さらにこの論拠から出発して、C の chart 1 (p. 105), D の Fig. 5 (p.253) のやや印象的な表を構成する。

2) D, p. 172. では5変数1束という、恐らくタバづくりの原点について、その必要と意味をのべている。

3) もっとも第3論文自体では、「次元」についての呼称が Bales (Interaction Process Analysis 1950, p. 10, 127, 153) のものであり (記号的には A, G, I, E), のちのものとはやや異なる。

を見よう。

この観点に立った場合、すぐ思い浮かぶのは、カタ変数は元來行為に関する範疇だが、社会の分析にも使われることである。周知のように、この点、主要な利用方向が2つある。第1は、諸「社会」の経験的構造比較である。前にもふれたように、2組のm変数でつくられる2×2の表(C, Table 2a, p. 102, D, Fig. 10, p. 258.)が用いられる。例示的にはUniversalism-Achievement型として米国とプラグマティズムを、Universalism-Ascription型としてはドイツの文化理念を、Particularism-Achievement型としては儒教中国を、Particularism-Ascription型としてはスペイン系中南米を挙げ、立入ってこれを論ずることは、よく知られている(C, pp. 107~111, pp. 180~200, D, pp. 184~185)。これに対して第2は、社会システムの理論を一般的に体系構成することである。この目的から、「試論集」でBalesの理論と結合することから、4機能図式が誕生することは、改めてここに繰返すまでもない。

以上は、カタ変数図式のpopularな活躍舞台であるが、しかし変数が「行為システム一般における範疇」(1953, d. p. 627.)であることも、この図式にとって決して軽視をゆるさぬ課題である。「総合理論」は、とくに、この任務に忠実であった。すなわちそれは、カタ変数図式の最初の登場舞台であるとともに、他面そこでは、その任務の全面的徹底的な達成がこころみられた。この意味で「総合理論」における変数図式の利用を簡単に概観しよう。

まず、そこでのカタ変数の定義はきわめて明確であり、「根本的に言って、カタ変数は価値志向の記述のための範疇である」(D, p. 79.)ということであったが、さらにこのpattern variables of value-orientationは、パーソナリティー・文化系・社会系という「3種のシステムが接合する決定的要点の1つを体系的に構成するもの」であり、その意味から、行為理論全体をつらぬく「連続性の最も重要な系」、「全行為理論の特異な

戦術的焦点」である⁴⁾。

かようにして「総合理論」でカタ変数は、行為理論の包括的体系による心理・文化・社会の統一的把握の実質的な担い手という、きわめて重大な任務を負うことになる。このためParsonsは、さまざまな試みを執拗につづけているが、その詳細はここに叙ぶべくもない。ただ、主体や役割の主要な経験的類型の、カタ変数のタバの形での、構成の試み(D, pp. 215~218, Fig. 13, 14, p. 273, 274, C, pp. 84~88)などは、上記の諸社会の経験的構造比較とならんで、きわめて印象的である⁵⁾。

しかし、彼のこういう努力が激しかっただけに、反面「社会システムおよび社会の一般理論」での不成功、すなわち、その分析が「さまざまな社会システムの現実の構造類型の分類」に到達しえぬこと(D, pp. 219~223)については、恐らく遺憾を禁じえなかったであろう。しかしやがて道は開ける。まず、Balesがもたらした「システムの4項の機能的課題」の着想は、変数図式と4機能図式との結合という飛躍を可能ならしめたし(「試論集」)、さらにこの上に、既成経済学の再考察は、サブシステム相互間の互換という、新しい武器をこれに附加した。

かようにして彼の理論は好運な発展をとげるが、同時にまた、その視野が、ほぼ、行為から社会に移動したこと、またこの視野の移動にともなって理論の増築作業が繰返されたことも、否みがたい。ところで、かように焦点が速く移動し理論の大増築が行われる場合、理論の実体に変化はなかったであろうか。このことが問題となる。

この点、Parsons自身の見解について言えば、変化はない、というのが彼の見方のものである。例えば「試論集」でBalesと彼との間の理論的収斂を論ずる場合、「この接近のために、如何なる手直しも自分の理論には必要ではない」というのが、収斂に関する彼の説明の主要であり、さらに「カタ変数は、行為のもっとも一般的概念図式から直接にderiveされることも、〔「総合理

4) なお、カタ変数が、行為図式の基本的諸範疇から導出deriveされていることも、同時に注意すべきであろう。(D, p. 84, Fig. 2, p. 248.)

5) Parsonsは「行為類型」について語らないわけではない(D, pp. 67~76)が、この言葉の使用にはきわめて慎重なようである。

論」で「すでに示された」と言い、基底が不変であることを強調しているのである (E, pp. 63~70)。

しかし、行われたのは増築だけであり、改築は全然ないか。手続きの厄介な、細かい問題なので、逐一具体的に考えねば確実な答えは出ないが、50年代前半に関する限り、些末細微な事柄は別として、やはり、余り変化はないように思う。別に本人の主張を鵜のみするわけではないが、大規模中規模の変化は殆んど起らないまま、理論の拡充強化が進行したというのが、この時期の Parsons についての私の印象である。

IV カタ変数と4機能図式との統合の一般化

最後の「再考」(1960)は、Robert Dubin の論文に対する答えである。Dubin の問題提起が、恐らく長期間彼が念頭にいただいた思索にふれたためであろう、その蓄積が溢れ出るかのごとく吐露されており、批判に対する通常の応答と著しく類を異にしている。かようにして本論文は、あの論理的抽象的構成という彼の仕事の型の1つの代表例であり、充実している反面、相当厄介だが、何れにせよまず、前提となる事柄を3点、説明しておくことが必要である。

第1は、Dubin のいわゆる“looking out”接近と“looking down”接近との対照である。

カタ変数図式のシステムへの応用の一般的理解は、まずカタ変数のタバがあり、それがシステムの構成部分の特徴づけるということである。「総合理論」における Parsons はこの立場であった、と Dubin は解し、これを「行為主体の好都合な足場から社会システムを見渡す」(“looking out” to the social system from the vantage point of the actor) 観点と呼ぶ。これに対して

「経済と社会」における Parsons の見方は、「社会システムの視座から個々の行為主体を見下す」(“looking down” at the individual actor from the perspective of the social system) それである、と Dubin は解する。表Ⅱを用いていうと、例えば「適応」のサブシステム A と specificity-universalism の変数束とは、単なる対応関係ではない、前者が後者を決定する関係を意味している、というのがその理解である。実際、彼はハコを現わす最左欄と右欄の変数との間に→を入れてこの決定関係をあらわす(彼の論文、L, p. 531. におけるモデルⅡ)¹⁾。

彼はまた、前の立場では社会的行為は「[a] 行為主体の客体の把握と [b] 行為主体の客体への志向、という2つの主観的・社会心理的単位の所産」であり、後の立場ではそれは「一切の社会システムに見られる、あの4項の機能的課題の各々に対応して定まる役割規定の所産」と見られると言って、この対照を説明する (L, p. 530)。マイクロ、マクロの表現を用いて、前者はマイクロ→マクロの立場、後者はマクロ→マイクロの立場と要約してもよいが、とにかく Parsons の観点は、「総合理論」と「経済と社会」の間で、かように逆転している、と Dubin は主張する。

第2は、4機能図式の新しい視点ともいうべきものである。——Parsons は、常用の AGIL とならんで、いつの頃からか、外—内 (external-internal)、手段—目的 (means-ends, instrumental-consummatory) という区別を用いはじめた²⁾。システムを4分したとき上の段 (もちろん「行」でもよい) が外 (対外的) であり、下の段が内 (「内部的」) であり、左の列が means (instrumental) であり、右の列が ends (consummatory) である。

かようにして例えば、AGIL は、「ソト—手段」「ソト—目的」「ウチ—目的」「ウチ—手段」

- 1) 上記のとおり、Dubin の論文は、いま Parsons の論文集 L で見ることができる。なお Dubin は「総合理論」の立場を上記のように解し、これをモデルⅠで示す (L, p. 524)。
- 2) たとえば T. Parsons, “General Theory in Sociology”, in R. K. Merton (ed.), *Sociology Today*, 1959. もちろん、部分的にはこの区別はうんと早い。なお、instrumental-consummatory よりも means-ends の方がみやすいが、この区別は “Some Problems etc”, 1969. に見られる。
- 3) Parsons 自身の表現は、external-means (adaptation), internal-means (pattern-maintenance) などである。(1969, “Some Problems etc.”, p. 32.)
- 4) モダリティ—とオリエンテーションの区別が正式に登場するのも、既述のとおりこの「再考」からである。

と言いかえても良いことになる³⁾が、この図式再定義は、さしあたり、1°) 社会系・行為系をこえ

て生物系 (living system) 一般に妥当する形となり、図式はその根源的意味に即して来、2°) さ

表IV The Components of Action Systems

(Adaptation) (Goal-Attainment)

	<u>A</u>	<u>INSTRUMENTAL</u>	<u>CONSUMMATORY</u>	<u>G</u>	
EXTERNAL	External	Adaptive Exigencies Represented by "Symbolic" Meanings of Objects COGNITIVE SYMBOLIZATION	 EXPRESSIVE SYMBOLIZATION	Modalities of Objects <u>Universalistic</u>	<u>Particularistic</u>
	Internal	 EXISTENTIAL INTERPRETATION <u>Instrumental</u>	 MORAL - EVALUATIVE CATEGORIZATION <u>Consummatory</u>	OBJECTS OF "GENERALIZED RESPECT"	OBJECTS OF IDENTIFICATION
INTERNAL	Specificity	<u>Neutrality</u> INTEREST IN INSTRUMENTAL UTILIZATION	<u>AFFILIATIONS</u> CONSUMMATORY NEEDS	Integrative Standards for Orientation ADAPTATION	 GOAL-ATTAINMENT
	Diffuseness	NEEDS FOR COMMITMENT	NEEDS FOR AFFILIATION	 PATTERN-MAINTENANCE <u>Instrumental</u>	 INTEGRATION <u>Consummatory</u>
	<u>L</u>			<u>I</u>	
	(Pattern-Maintenance)			(Integration)	

らに、図式がはるかに透徹したものとなる、という2点で重要である⁴⁾。

図式のこの見直しが、「再考」でも利用される。実際、次に説明する表IV、Vでは、たえずこの区別がその中で用いられる。

——便宜上、用語をすこし先取りしたが、4機能

表V The Action System in Relation to Its Environment

		STRUCTURAL CATEGORIES		CATEGORIES OF PROCESS			
		Units of Orientation to Objects(L) (Properties of Actors)	Integrative Standards(I)	Symbolic Representations of External Objects(A)	Internal Meanings of Objects(G) (Inputs-Outputs)	Outputs to Environment	
Direction of Control ↑ Direction of Limiting Conditions ↓	L	Neut Diff	Qual Neut	Diff Univ	Univ Qual		
	I	Aff Diff	Manifold of evaluative selections INTEGRATION Allocative selection	Part Diff	Aff Qual	Part Qual	Responsible Action
	G	Aff Spec	Range of action-choice GOAL(attainment) SELECTION	Perf Aff	Spec Part	Perf Part	Expressive Action
	A	Neut Spec	Empirical- cognitive field ADAPTATION Means-Selection	Univ Spec	Neut Perf	Perf Univ	Instrumental Action
		Direction of Implementation vis-a-vis Environment →			← Direction of Environmental "Stimulation"		

第3。この論文で重要な2表を、そのまま表IV、Vとしてかかげる。——まず表IVから説明を進めよう。表IVは、4つの子バコ (cell) をふくむ母バコ (cluster) 4つから成る。母函も子函も4機能図式にしたがうが、母函は A G I L で表わされている。子函について表は別に記号をもうけぬが、ここでは *agil* を共通記号とし、例

えば I_a で“the *a* cell in the *I* cluster”を表わすことにする。もっとも表IVでは、子函には *a, g, i, l* の区別は書いてなく、その代りに、外・内、手段・目的の区別が枠外に書込まれている。表IVの説明をつづける。——まず、右下の I 母函を見よう。それぞれ子函に **INTEGRATION**, **ADAPTATION** などの「看板」があるが、この

看板は表Ⅱのとおりであり、子函の右肩に書いてある変数束も表Ⅱと同様である。なおここでは、変数が矢線（ m 変数はタテのそれ、 o 変数はヨコのそれ）で表わされている⁵⁾。

表Ⅳの他の母函にうつろう。 A 母函では、各子函の看板は複雑になる。ここにも子函に対応する変数束が貼付けられているが、これは「試論集」で言及した「補助的な組合せ」である。 G 母函を見ると、ここでは m 変数の対がヨコとタテとに書かれており、例えば G_a には **universalism-performance** という変数束が対応するというように、組合せで出来る4つの変数束が子函に対応している。この意味で G は **the modality set** と呼ばれる。これに対して L は、 o 変数を利用した **the orientation set** である。

この表Ⅳに **Parsons** は「行為システムの諸成分」(**The Components of Action Systems**) という表題をあたえている。行為システムという以上、社会系・文化系・パーソナリティ系・行動的生活体という4系を ($I L G A$ として) 含むはずだが、どういうわけか、本論文では全然そのことに言及しない。「成分」は、字義通りに解すれば、母函からカタ変数までの、全段階の成分の何れをも意味しうるはずである⁶⁾。

表Ⅳから表Ⅴにうつろう。表Ⅴは、タテには (L) (I) (A) (G) の列がならんでおり、ヨコにも $L I G A$ の段がある。まず列(タテ)をとって見る方が、よくわかる。例えば、最左列(L)についていうと、変数束あるいは「看板」からわかるように、これは、表Ⅳの L 母函から $liag$ の順に子函をとり、これを上から順次置いて行ったものである。他の列 (I) (A) (G) も同様である。

表Ⅴではさらに、ボックス全体の4周が、いろいろの言葉で縁取りされている。行為系の一般理論は、こういう4機能図式の再編制や縁取りを通

じて、徹底的な拡充強化を受けることになるが、表Ⅴはこの一般行為理論の発展の表式化に他ならない。表Ⅴは、「この意味で、「カタ変数と4機能図式との統合の一般化」(**L, p. 192**)を示す表Ⅳと表裏するが、ここでは表Ⅳに焦点をおきながら「再考」における変数図式の展開を見て行こう。

「再考」立論の前提事項3点は以上の通りである。次にこの3点を前提しながら、この論文の内容に立入るが、既に見たように、この「再考」には、それが晦渋なことや含蓄に富むことのため、説明が困難な点が多くない。この意味で、まず幾つか、問題を設定し、これに対する「再考」の応答を見ながら、彼の思索の跡をたどるのが、その真意を知る捷徑かと思う。ここではこの趣旨から、次に4個の問題を設定する。

(一) カタ変数図式は一般行為理論の1つの用具だが、この観点から見た場合、カタ変数とはいったい何か。

(二) **Dubin** は、“looking out” 接近と “looking down” 接近との対立と **Parsons** の立場の変化を主張し、**Parsons** もこれを承認するかに見えるが、この2つの接近は實際何を意味するか。また、**Parsons** の立場の変化ということは事実どこまでありうるのか。

(三) 4機能図式にしたがって、一般行為系を4分し、さらにこれを4分し、結局16の子函をつくったとき、変数束がこの16のハコに、ちょうど表Ⅳの結果が生ずるように、配分されるのは、如何にしてであるか。

(四) 表Ⅳの構成は上記のとおりであり、各母函の中で変数は4の子函に配置されている。この場合、その配置の状況は母函ごとに違っているが、すこし調べれば直ぐ気づくように、その配置は決して乱雑無法則ではない。それでは、そこには如何なる法則的關係が含まれているか。また、その法則はどのような意味をもつか⁷⁾。

5) したがって、表Ⅳの i 子函 (I 母函) の **Diff** と **Part** とは入れちがいである。

6) 「再考」本文での “component” という言葉の用語法について見ると、母函の意味では用いず、子函の意味のことが多く、カタ変数の意味での使用もある、ということのようである。

7) 本稿は「カタ変数理論の発展」を主題とするから、以上の問題設定もこの主題に関係する範囲にとどめた。若し目的がこの **Parsons** の論文「再考」全体についてその本旨を明かにすることにあるならば、さらに次の2つの設問を追加せねばなるまい。

(五) 両表とも子函には、いわゆる「看板」、すなわちその特徴を示す呼称が書かれている。それではこの呼称

以下、この4個の問題に答えながら、「再考」における再検討の趣旨を明かにしたいが、便宜上(二)(一)(四)(三)の順序で説明をすすめる。

(二) Dubin の2つの接近の対立という図式は誤解をまねき易い。前にのべたように、社会構造と行為主体との間で行われるのは、相互作用であり、2つの接近はむしろ補完的である。また、文献的根拠からいっても、DG間に観点の反転があるという主張も成立しないと思う。

もっとも、2接近の対立と交代ということも、単なる印象としてならば、一応理解できる。実際、Sprottも主張しているように、システムの4機能的構想の導入とともに、カタ変数のかげが薄くなったという印象があるからである。Dubin自身も、「社会心理学を基礎とした状況から、社会系の機能が重要となり、理論構成の単位が社会構造的要素になる状況への推移は、社会行為のモデルの構築にとっては、局面の根本的変化を意味した」(L, p. 522)ことを主張するが、これも同様の印象に他ならず、2接近の交代を理論的に根拠づけるものではない。

かように2接近の対立から出発するDubinの主張には余り意義をみとめ難いが、これに関連する部分に、1つだけ、辛辣な指摘がある。Parsonsでは、系の機能的課題ごとに、それに対応する変数束が1つある。したがって「そのモデルには、社会行為類型(types of social acts)は4つしかない。これは単純化の行きすぎでないか。」Dubinのこの議論がそれである。

かような事情であるから、Parsonsの応答も複雑である。まず、2接近の対立交代についていうと、一見Dubinの批判をそのまま受入れているかに見える。しかしParsonsのこの点の議論を丹念に見ると、Dubinのそれと少しも噛み合

わない。2人は全く喰いちがっているのである⁹⁾。

しかし「行為類型が4個だけなのは貧弱すぎる」という批判については、事情がちがう。彼が直接にこの批判をとり上げた場所を、私は知らないが、実質上これにふれていると推論されるところは、可成り多い(L, pp. 193~197)。いまこの「反批判」についてのべると、まず彼が「行為類型」という呼称についてきわめて慎重だという、前にもふれた事情に注意せねばならぬ。第2に、上記のとおり、カタ変数と4機能図式との統合を具体化する表を、表IIから、表IV、Vにかえることが、重要である。第3に、この表と関連する方法的性質として、次の2点が意味をもつ。すなわち、(1)それぞれ、対応の相手として子函をもっている、あの変数束は、いつも行為(系)の「成分」として扱われ、行為類型とは考えられない。(2)表IV、Vは「行為〔または行為システム〕の成分の分類のための概念図式ないし範疇のセット」であるが、表IIは、部分系たる社会系を基礎とし、決して類型学たりうるものではない⁹⁾。——要するにDubinの批判は、カタ変数と4変数図式との統合が行為(系)分析の理論的用具として有する意義についても、行為(系)分析における変数束の役割についても、根本的な誤解を含んでいるというのが、Parsonsの主張だ、と言える。

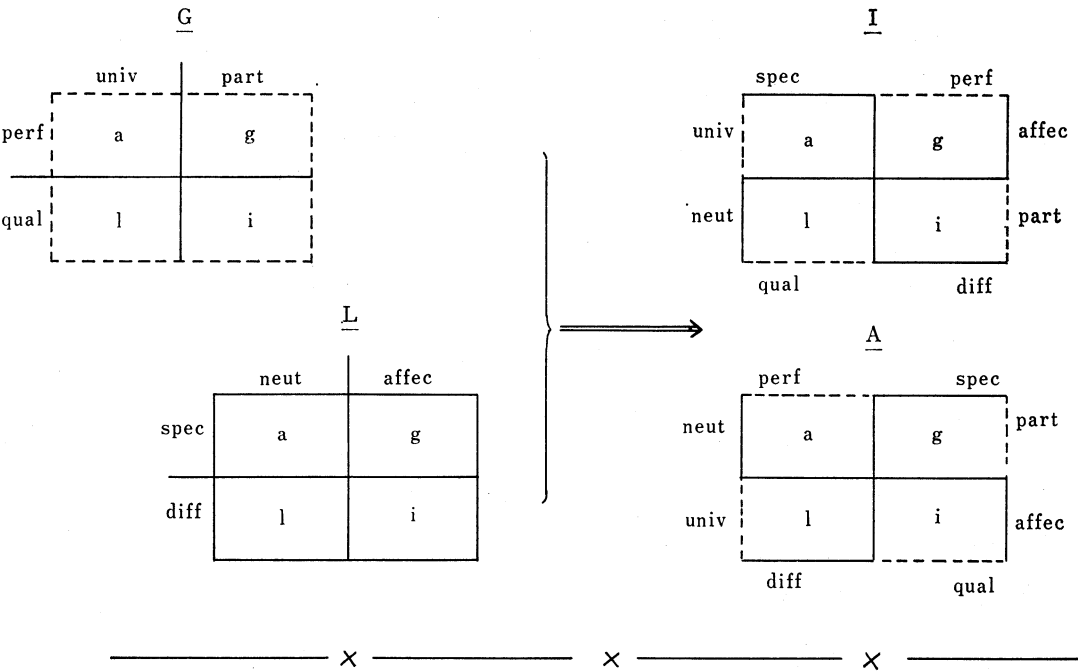
(一) カタ変数をどう把えるかについては、規範的側面重視の立場を、いっそう洗練を加えながら、Parsonsが一貫する点が、重要である。——前に引用した「価値志向のカタ変数」という表現は、その後見えなくなるが、しかしその立場はつづく。「symbol-cultural systemのコードの側面が行為系の「構造」を形成する」が、カタ変数図式は、「行為の領域でのこういうコードの基本的成分の分類を構成するものである」とのちに

は何を意味するか。

(六) 表Vは一般行為理論の拡充強化を総括しようとするものであるが、そもそもこの拡充強化は如何なる内容のものであるか。

- 8) 詳細は省略の他ない。なお上記のように、Parsonsが、1939年の論文についてだけ looking out をみとめているのも、喰いちがいの一例である。
- 9) なお、「行為類型」というときは、可成り内容を含むものが一般に要求されやすい。これに対して、Parsonsのカタ変数が、形式的性質のきわめて強いものであることは、注意を要する点である(D, pp. 186~187, 1953 d, p. 627)。

表 VI G, L と I, A との関係



	<u>G</u>	<u>L</u>	<u>I</u>		結果を合成すると
	(モダリティー)	(オリエンテーション)	それぞれの廻転の結果		
			m の部分	o の部分	
(a)	univ → ↓ perf	neut → ↓ spec	univ ↓	spec →	spec ↓ univ
(g)	part ← ↓ perf	affec ← ↓ spec	perf ←	affec ↓	perf ← affec ↓

述べている (1969 “Some Problems etc.” p.44) のは、恐らく最もよくこのことを示している¹⁰⁾。

四 この問題は技術的なので、論文の説明不足部分だけ補うことにしよう。ここでは「機能上同族関係に立つ」 (“functionally cognate”——以下しばらく f. c. と略記する) 子関という概念が重要である。まず、この概念を説明しよう。

表Vの第2段、つまり I または i の段は、上記のとおり、表IVの各母関から i 子関を取り出して並べたものである。その元の i 子関が各母関に、1つずつ、あるわけだが、この4つの i 子関が、 i に関して、f. c. なのである。

さて Parsons は、 \underline{GL} という母関、つまりモダリティー・セットおよびオリエンテーション・セットを所与とした場合、それからどのようにして \underline{IA} という母関がつけられるか、という問題を設定する。表VI上半部は、この問題の図式表示である。態様と志向とを、点線と実線とで区別している。るところで左側の \underline{GL} から右側の \underline{IA} がどうして出てくるか。詳言すると、 \underline{I} も \underline{A} も、 m 変数、 o 変数の一定の分布をもっているが、そういう分布は、左側の \underline{GL} から、どのようにして、生れるか、これが問題である。

これに対する Parsons の解答をまず述べれば、次の通りである (L, p. 212)。

「(1) まず I 母関について。 m 成分の分布はどうして導き出されるか。まず、子関間の「機能的同族関係」を動かさぬようにし、モダリティーの軸を右廻し clockwise に 90° 回転する。また o 成分の分布は、オリエンテーションの軸を、左廻し counterclockwise に 90° 回転してえられる。(2) \underline{A} 母関については。それぞれの場合、回転の方向が逆になるだけである¹¹⁾。

表VI下半部は、この解答の説明である。もっとも、 \underline{I} の、しかも a, g だけの導出の図解である。まず、 (a) の段を説明しよう。左の \underline{GL} は所

与であり、ここでは f. c. の子関、 G_a, L_a がえがかれる。次にこれに回転をあたえる。 m 変数に対しては、右廻し (時計の針と同方向) の、 o 変数に対しては、左廻し (それと反対方向) の、回転をそれぞれ与える。その結果が、その右に、 m の部分と o の部分とに分けて、描かれている。それを合成したのが最右の図である。見られる通り、 \underline{I} の a が出来ている。

第2段目の (g) についても全く同様である。その結果は、上半部の \underline{I} の図と比較してわかるように、 I_g である。(i), (l) も同様に行い、同様の結果を得る。この4つの結果を合成すれば、上半部の \underline{I} が出来る。

全く図を描いていないが、 \underline{A} の導出も同様である。回転が反対になるだけである。

Parsons は、さらにこの手続きをくわしく意味づけている (L, pp. 213~214)。その説明には多少過不足があるようだが、根柢をなすのは上記の事柄であるから、ここには詳説しない。

(三) この問題の私の解答は充分明確ではないが、問題の内容そのものは、はっきりしている。まず、この問題の内容をのべよう。

さて表IV, Vでは、どの子関にも変数束が配分済みだから、当面の問題から言って、これは問題の解答である。これに対して、どの子関からも変数束を消した表IV, Vを考えると、それが出発点の状況になる。

ここでは表IVだけで考えよう。この変数束を消した表IVに、どのようにして、変数束を貼りつけるか。しかし、問題はそれだけではない。変数束は、前にものべたように、24束ある。このうち、8束を落選組に編入しながら¹²⁾、配分は行われるが、如何にこの配分が行われるか、が問題である。

この配分の方法としては、一般的に言って、2つの極端な場合がある。第1は、配分の決定に必

10) 「カタ変数は rubrics of classification だ」という「再考」(L, p. 200)での言葉も、同様の意味なのであろうか。なお、この前後の Parsons の文章にはやや注目すべきものがあるので、つぎに引用しておく。「Fig. 1 [本稿表IV]の部分系 \underline{L} として書かれている表 [2×2の子関の集り] は客体へのオリエンテーションの諸類型の分類を形成し、この点で rubrics of classification たるカタ変数そのものとは区別されねばならぬ。ところでこういう区別は、未だかつて、私の業績の中でも他の学者の業績の中でも解明されたことがないと思う。」

11) 簡単のため「右廻し」「左廻し」というが、その意味に注意されたい。

12) この落選組には、particularism-affectivity のようなものもあれば、particularism-neutrality のようなものもある。クズばかりではないわけである。

要な諸原則が全部予めわかっている場合である。配分は、即座に 100% きます。第 2 は、こういう原則が全然わからない。とにかく納まりの良い配分にヒットするまで、試行錯誤を繰り返す場合である。仮に「知慧だめし」的ケースと呼んでおこう。現実には、この中間が多い。

母函 4 のうち、I 母函への配分は即座に行われる。I 母函は、社会系の位置であり、そこでの変数束の貼りつけは、表 II の示すとおり、既定だからである。

さて次は G と L とである。G には m 変数束群が来、L には 0 変数束群が来るが、これは如何なる根拠からか、これが問題である¹³⁾。

この根拠としては、(α) 一般行為系図式には、 m 変数ばかりのセットや 0 変数ばかりのセットがあつていいという論拠、() 行為系の分化の進行過程で、G と L とは I, A よりも古い層になるから、その構造は単純でいいという着想、(γ) G は「外」、L は「内」だから、その構造が単純な場合、G は m 変数の、L は 0 変数の、セットになるろうという推論、が考えられる。(α) については、Parsons も或はそう考えたかも知れないが、(β)、(γ) は、これを有力な根拠たらしめる文献的理由はあまり見当たらない。

最後の A 母函には、いわゆる「補助的組合せ」が来るが、それはどういう根拠からか。皆目見当が立たぬわけではないが、信頼できそうな理由は、今のところ、見当たらない。——止むをえず、複雑な推理を多少重ねたが、設問(三)については、I の場合をのぞけば、余り確信ある解答はえられそうにない。この点、設問(四)に対する Parsons の解答が明確であったのとくらべて、対照的な感じがする。

以上、4 個の設問について説明を進めて来た。

カタ変数図式を中心においていえば、「再考」で Parsons が論じていることの大意は、かなりな程度まで明かになったと思う。Parsons は、ここで行為系の一般理論の拡充強化に説き及んでいいるが、この部分については、また他日を期したい。同時にまた、本稿で取扱った期間の彼の行為理論の、カタ変数理論以外の諸側面の考察も、決して軽視しがたい課題であろう。

附記 (一)紙幅の拡大をさける目的もあり、説明、言及、引用など、諸所で省略したことを、断わっておきたい。(二)カタ(型)、タバ(束)、ハコ(函、母函、子函)の用語を試用した。ハコに関連していえば、長ささへかまわなければ、他にもよい用語があろう。(三)「変数值」「変数値束」をたいてい変数、変数束と略記した。Parsons 自身の表現の推移の指摘のうちにこれを示唆したわけだが、やはり明示的におことわりしておいた方がよかつたかもしれない。何れにしても、一方では(彼自身の説明はやや不鮮明だが) pattern variables が、2 値だけの値域をもつ(恐らくいわゆる“dichotomous”な)変数であること、他面、変数と変数値との区別が必要でなく、むしろ煩わしいような構造が問題にあること、さしあたりこの 2 点に注意すべきであろう。(四) Talcott Parsons の社会理論について、作田啓一、富永健一、吉田民人、倉田和四生の諸氏が残された丹念な研究からは、これまで多くのことを教えられて来た。また、永井道雄・作田啓一・橋本真共訳「行為の総合理論をめざして」、佐藤勉訳「社会体系論」、富永健一訳「経済と社会」の辛苦多い訳業にも、日頃学ぶところ少くなかつた。本文中、この点言及の機会を逸して恐縮であるし、また最後になって申訳けないが、ここにその事を記してお礼申し上げたい。

13) G に m 変数束群が来れば、次にはその子函への配分が問題になる。これが、第 2 次的接近の問題だが、これには何か解決の道がありそうだから、ここでは、「G に何故 m 変数束群がくるか」という問題に重点をおく。L の取扱いについても同様である。